

報告

2015 年度徳島大学 FD 推進プログラムの実施報告

赤池雅史 川野卓二 宮田政徳 吉田 博 川瀬和也 久保田祐歌 上岡麻衣子
徳島大学総合教育センター

要約:FD 推進プログラムは 2002 年度から開始され,FD の体系化,組織化,日常化等を推進してきた。2015 年度は,従来実施してきた FD 推進プログラムに加えて,大学教育再生加速プログラム (AP) の効果的な実施のための支援と,教育の質保証のための新たな教育システム構築 (ナンバリング) 支援によって,本学の教育の質向上を目指した。具体的には,1) 教育改革 FD,2) 教育力開発 FD,3) 総括的な FD に分かれる。各プログラムについて概要を記載し,アンケート結果等から成果と今後の課題について考察する。

(キーワード:新任教員研修,ナンバリング,大学教育再生加速プログラム,SIH 道場,授業コンサルテーション,大学教育カンファレンス)

An annual report 2015 on campus wide Faculty Development programs at The University of Tokushima

Masashi AKAIKE Takuji KAWANO Masanori MIYATA Hiroshi YOSHIDA
Kazuya KAWASE Yuka KUBOTA Maiko KAMIOKA
Center of University Education, The University of Tokushima

Abstract: Tokushima University's FD promotion programs have started since 2002, promoting systematization, organization and routinization of Faculty Development. In 2015, in addition to the previous FD promotion programs, we have aimed to enhance the quality of higher education of our university, supporting effective implementation of Ministry of Education's AP (=Acceleration Program for University Education Rebuilding) & building new educational system "Numbering System" for the assurance of higher education. Concretely, we carried out 3 programs; 1) educational innovation FD, 2) educational development FD, 3) comprehensive FD. As to each program, we showed their outlines and considered their results and problems shown from the questionnaire to their attendants.

(Key words: new faculty seminars, numbering system, Acceleration Program for University Education Rebuilding, SIH Dojo, individual consultations, education conference)

1. はじめに

2015 年度の全学 FD 推進プログラムでは,2002 年度の開始からこれまでの成果を基に,学修成果の可視化を含めた教育の質保証のための教育システム構築を目指した。その実施にあたっては,総合教育センター教育改革推進部門のメンバーが FD 担当教員となり,各学部ならびにその教員のニーズに合わせた支援を通して,本学の教育の質の向上を目指すことを基本方針とした。具体的な取り組みは,1) 教育改革 FD,2) 教育力開発 FD,3) 総括的な FD の 3 つで構成した。

教育改革 FD については,「質保証のための分野別ワークショップ」として,2014 年度に作成したカリキュラムマップ (2015.5.20 大学教育委員会議題 2 資料) を基に,授業科目のナンバ

リングを実施した。これは,カリキュラムマップの作成と同様に,大学教育委員会で決定された方針に基づいて,各学部教員と FD 担当教員の共同作業で実施した。このような方法は,カリキュラム開発者や FD 推進者を対象としたミドルレベルの FD の実質化に大きく貢献したと考えられる。

教育力開発 FD では,新任教員を対象に,個人の教育力向上を目的としたミクロレベルの FD として,「授業設計ワークショップ」,「授業コンサルテーション」,「ティーチング・ポートフォリオ作成ワークショップ」の 3 つで連続的に構成される教育力開発コースを提供した。このコースは,教員が教育活動を行う上での重要な要素を理解することに加え,個々の実践的な教育活動を支援するものである。また,2014

年度に採択された文部科学省大学改革推進等補助金「大学教育再生加速プログラム(テーマ I : アクティブ・ラーニング)」

(<http://www.tokushima-u.ac.jp/campus/education/acceleration.html>) を効果的に実施するために、アクティブ・ラーニングの基本、e ポートフォリオの活用、反転授業の理論と手法等、SIH 道場の担当教員が授業を実施する上で必要な知識と技能を修得することを目的とした FD を実施した。

総括的な FD では、これまでの FD 活動の成果を検証し、FD ネットワークの充実・発展をはかるために、「大学教育カンファレンス in 徳島」を開催することで、本学や他の高等教育機関で行われている教育実践の先駆的な取り組みの共有を行った。さらに、本誌「大学教育研究ジャーナル第 13 号」の発行を行った。

このように本学の FD 推進プログラムは、教育の質の検証と継続的な改善を推進する原動力として実施された点が特徴である。さらに、社会のニーズや教育技術の進歩に対応しながら、大学教育委員会や各学部と連携して、アウトカムを見据えて双方向性に FD を創り上げていくことが必要である。以下、今年度の各 FD の具体的内容とその成果を述べる。(赤池雅史)

2. 質保証のための分野別ワークショップ

2015 年度の全学部局別 FD は、前年度に引き続き、質保証のための部門別ワークショップを行い、カリキュラム・マップ作成に関する FD に続いて、科目ナンバリング・システムの構築を行う方向ですすめることになった。それに先立ち、2014 年 12 月の大学教育委員会で、徳島大学版のナンバリングの原案を教育改革推進部門で作成中であることを報告(2014.12.17 大学教育委員会報告 7 資料)し、2015 年 1 月の大学教育委員会において、カリキュラムマップが作成完了した学部・学科等については当初の予定を早めてナンバリングに着手する旨の報告を行った(2015.1.21 大学教育委員会報告 3 資料)。そして、2 月の大学教育委員会において「科目ナンバリング・システム作成について(案)」を

審議し、「科目領域コード」及び「学部・学科コード」については、各部局と協議の上、作業を進めながら修正していくことを確認し、新学部も含め、カリキュラムマップの作成が完了している部局については、早急にナンバリングの作業に着手する旨を依頼した。

学内全体でナンバリング・システムの導入に対する意識づけを行うために、2015 年 3 月にテンプル大学ジャパンキャンパスの島田敬久先生を招聘し、「ナンバリング・システム導入の意義—体系的教育課程の構築と学修支援のために—」と題し、講演会を開催した。この講演会への参加人数は、事務職員を含めて 35 名であった。

2015 年度に入り、4 月の大学教育委員会において、修正案を提出し、そのとおりに承認されたのをうけて、翌日から、学内の各部局と個別に説明会を開き、作業を進めていった。4 月に、総合科学部教務委員及び将来構想委員、生物資源産業学部(仮称)の教員、工学部の教務委員に対して説明会を行ない、5 月には、医学部(医学科、医科栄養学科、保健学科)の教務委員、薬学部教務委員長、全学共通教育センターと歯学部(口腔保健学科、歯学科)の担当教員、そして 8 月に、再度全学共通教育センターと医学部(保健学科)の担当教員と打ち合わせを行い、さらに残っていた理工学部(仮称)の担当教員に詳しい説明を行った。

10 月の大学教育委員会で、それまでの説明会や打ち合わせを経て作成したナンバリング・システムについて報告を行った。また、12 月には、2016 年 4 月からの運用に向けて、教務システムへのナンバリング登録作業についての事前周知を行った。

今回作成する徳島大学のナンバリング・システムは、以下のルールにしたがって各科目にコードを割り当てている。まず、構成要素として、「科目領域コード(英字)」、「科目番号(4桁の数字+言語コード)」、「学部・学科等コード(英字)」の三つの要素を組み合わせて、各科目を表す科目コードを作成し、もし、同一科目が複数存在する場合は、末尾に「セクション番号(2桁の数字)」を追加してそれぞれの科目を区別す

る。科目分類(領域)コードは、その科目が属する学問領域に対応させる。学問領域名は、科学研究費助成事業の系・分野・分科・細目表を元にして、その英語表記の一部やイニシャルを組み合わせて4文字で表すこととした。もし、適切な領域名がない場合は、科目内容に関連した領域名を新しく作成し、同じように4文字で表した。科目番号は、4桁の番号と1文字の言語コードから成る。このうち1桁目の数値はその科目のレベルを表し、次の3桁は授業方法を反映した個別の番号を、5番目のアルファベット1字は授業を行う中心言語を示すこととした。学部・学科等コードは、その科目を学部・学科・専攻コース等を表現するアルファベット3文字とし、セクション番号は、同一科目が複数開講されている場合に個別の科目を区別するために使用することになっている。

次に、今回作成したナンバリングの基本構造に沿った具体例を示す。

(例) MATH 1020J GED 02 基礎数学

それぞれのパーツの簡単な説明は以下の通りである。

- 1) 大文字アルファベット4字：科目領域コード(例：MATH：数学)
- 2) 数値4桁：科目番号 1桁目：水準番号(例：1：教養科目) 2~4桁：個別番号(例：000~399：講義科目)
- 3) 大文字アルファベット1字：言語コード(例：J：日本語)
- 4) 大文字アルファベット3字：学部・学科等コード(例：GED：共通教育)
- 5) 数値2桁：セクション番号(説明：複数同一科目が存在する場合に利用)

今回の科目ナンバリング・システムの対象となった科目数は、約2,300科目あり、使用する科目領域コードとして、現時点で103種類が予定されている。

■科目ナンバリング・システム作成の成果と今後の課題

今年度の新たな取り組みであった授業科目ナンバリング・システムの構築は、開講している

学部授業科目の学問領域をコード化して明示し、科目番号を用いて、その科目のおおよそのレベルや、講義科目、演習・実験科目といった授業の方法を表せるようにしたものである。これまで学務事務が使ってきた授業科目コードや時間割コードは、学生にとってはあまり意味を持たないコードであったが、ナンバリング・システムによる科目ナンバリングは、カリキュラムの中での当該科目の位置づけが理解しやすくなる便利なシステムとして学生も受け入れやすいと思われる。教員にとっては、担当する科目がカリキュラムの中でどの位置にあり、他の科目との関連が見えるようになるので、授業計画の際に他の科目内容との過度の重複を抑えた授業準備が行えるようになる。また、科目ナンバリングによって、それぞれの領域、レベル毎の科目数や、それらの科目の順序性が容易に理解できるようになるので、今後、学部や学科のカリキュラム改訂を行う際には、その議論を進めるための具体的な数値を提示しやすくなると期待できる。来年度からの施行において、昨年度作成したカリキュラム・マップと今回の科目ナンバリングとの融合的効果の検証を進めていくことが課題となる。(川野卓二)

3. 授業設計ワークショップ

実質的なFDの取り組みを進めるため、徳島大学の教育の質向上及び問題解決のための相互交流と日常的な教育改善のための研修である「授業設計ワークショップ」を実施した。本ワークショップは、授業コンサルテーション、ティーチング・ポートフォリオ作成ワークショップと共に「教育力開発コース」の1つであり、これら3つのプログラムを連続的に提供し、授業設計、授業の実施・改善、教育活動を振り返り、自身の目標を明確にして授業改善に繋げるといった一連のプロセスを支援するためのものである。本節では、授業設計ワークショップの内容及び成果と課題について報告する。

a. ねらい

本ワークショップは、授業設計の仕方と教育技術について学ぶものである。主な活動内容は、

さまざまな授業方法を学び、シラバスと授業計画の作成を行い、模擬授業を実施することである。アクティブ・ラーニングの理論や手法、授業の目的・到達目標の設定、授業実施の留意点、評価方法等に関する講義やワークを通して、参加者が自身の授業について考え、振り返ることにより、実践的な教育力の向上を目指している。本ワークショップの目標は次の4つである。

- ① FD 活動の理念、活動計画を理解することができる。
- ② 授業を計画し、実施し、評価する方法を体得することができる。
- ③ 授業研究の仕方を理解し、実践することができる。
- ④ FD 参加者同士の仲間づくりができる。

b. 概要

■開催期日

2015年6月20日(土)～6月21日(日)

■会場

6月20日：総合科学部地域連携プラザ2階
地域連携大ホール(けやきホール)

6月21日：共通教育4号館202講義室 他

■対象者

本ワークショップは学外(SPOD)へ開放しているため、学内のみならず、学外の教員も対象としている。

学内の対象者は、学外より講師または准教授採用後1年以内の教員、及び学内で助教から講師または准教授昇任後1年以内の教員を中心とし、2013年度以前に実施した「教育力開発基礎プログラム」の欠席者、2014年度に実施した「授業設計ワークショップ」の欠席者、推薦を受けた者(助教及び教授等)も対象としている。ただし、所属が教育系以外のセンター等、病院の場合、及びプロジェクト採用等の場合は除いた。また、次に該当する場合は参加を免除した。①学外で同様の研修を受けた場合、②担当する授業がない場合、③診療業務を主に担当している場合。

学外の対象者については、徳島県の大学・短大・高専(T-SPOD)及びその他SPOD加盟校の教員とした。

■参加者

今年度の参加者は、教員43名(徳島大学37名、学外教員6名)であり、詳細は次の通りである。

【学内教員】

氏名	所属	職名
上岡 義典	総合科学部	教授
佐原 理	総合科学部	准教授
OLAF SCHIEDGES	総合科学部	准教授
服部 恒太	総合科学部	講師
上野 雅晴	総合科学部	講師
櫻井 信之	総合科学部	講師
久田 旭彦	総合科学部	講師
河合 慶親	医学部	准教授
石上安希子	医学部	講師
奥村 仙示	医学部	講師
安倍 吉郎	医学部	講師
西庄 俊彦	医学部	講師
橋本 浩子	医学部	准教授
原田 永勝	医学部	講師
六車 直樹	医学部	准教授
米村 重信	医学部	教授
新垣理恵子	歯学部	准教授
岡村 裕彦	歯学部	准教授
工藤 保誠	歯学部	准教授
安陪 晋	歯学部	講師
大倉 一夫	歯学部	講師
RODIS OMAR MARIANITO	歯学部	講師
奥平桂一郎	薬学部	准教授
犬飼 宗弘	工学部	講師
河内 亮周	工学部	講師
大野 恭秀	工学部	准教授
山田 久嗣	工学部	講師
西出 俊	工学部	講師
水科 晴樹	工学部	講師
吉田 健	工学部	講師
岡本 敏弘	工学部	准教授
浅田 元子	工学部	講師
山本 圭	生物資源産業学部(仮称)設置準備室	准教授
岡 直宏	生物資源産業学部(仮称)設置準備室	講師
岸本 幸治	生物資源産業学部(仮称)設置準備室	講師
山下 聡	生物資源産業学部(仮称)設置準備室	講師

北岡 和義 教養教育院 (仮称) 設置準備室 講師

【学外教員 (SPOD)】

氏名	所属	職名
山本 義浩	徳島文理大学	講師
河合 浩行	徳島文理大学	教授
松尾 平	徳島文理大学	講師
大久保直幸	香川短期大学	助教
宮地 和樹	香川短期大学	助教
伊藤 俊輔	松山東雲短期大学	講師

■運営メンバー

運営メンバーは、副学長 (教育担当)、総合教育センター教育改革推進部門長 (FD 委員会委員長)、FD 委員会委員を含め、詳細は次の通りである。

氏名	所属	職名
高石 喜久		副学長
赤池 雅史	教育改革推進部門	部門長
大橋 守	総合科学部門	教授
石田 徹	工学部	教授
佐藤 高則	全学共通教育センター	准教授
上田 哲史	情報センター	センター長
阪間 稔	医学部	教授
岩田 貴	医療教育開発センター	副センター長
小山 治	インストラクショナル・ラーニング室	助教
川野 卓二	教育改革推進部門	教授
宮田 政徳	教育改革推進部門	准教授
吉田 博	教育改革推進部門	講師
川瀬 和也	教育改革推進部門	助教
上岡麻衣子	教育改革推進部門	特任研究員
金西 計英	ICT 活用教育部門	教授

■内容

2 日間にわたり、表 1 のプログラムを実施した。

■全体の流れ

【1 日目】

「(1) オリエンテーション」では、高石副学長より本学の教育改革についてお話を頂き、赤池 FD 委員会委員長より「研修のねらいと意義」についてお話を頂いた。続いて、授業設計ワークショップ全体の流れや教育力開発コースの意図や内容を説明し、昨年度の参加者の声を紹介

して、参加者の動機づけを行った。

「(2) アイスブレイク」では、参加者間の自己紹介を行い、参加者が交流を行いながら、ワークショップに対する目標設定を行った。具体的には日常の授業において悩んでいることや課題、これから挑戦したいことなどをグループ内で共有し、本ワークショップで身につけたい知識やスキルを書き出した。

「(3) 講義・ワーク アクティブ・ラーニング」では、学生の主体的な学習を促進するために、アクティブ・ラーニング、深い学び (Deep Learning) に関する理論や学習効果について説明し、徳島大学のアクティブ・ラーニングの定義やチェックリストを紹介した。続いて、学生の深い学びを促進するための問いかけについて理論と具体例を示し、実際に参加者自身の授業における問いについて考え、共有するためのワークを行った。

「(4) 講義 成績評価の仕方」では、授業設計と評価に関する講義を行った。はじめに、高等教育の状況や「教育実践を記録・顕在化し、それを教師同士が互いに吟味しあい、互いの教授・学習に関する実践的知識を積み重ねあう試み」として、SoTL (Scholarship of Teaching and Learning) の考え方が紹介され、授業設計のための理論については、「意義ある学習 (Significant Learning)」の 12 のステップを紹介した。その後、具体的な評価方法や学生の学習を促進するという観点で評価を適切に設計するための方法などを説明した。

「(5) 講義・ワーク より良い授業実施のために」では、授業の目的、目標、方法を設計する際の注意点や要点を説明した。授業を設計する際には、目的、目標を軸にして、授業内容、方法、評価に一貫性を持たせることが重要であり、参加者が実施している授業を想定してもらいながら、ワークを交えて解説を行った。具体的には、授業方法の具体例を説明し、それぞれのメリットやデメリットを紹介した。シラバスや授業計画書の書き方については、徳島大学が定める「シラバス作成ガイドライン」に則り、目標設定の仕方や、その記述方法を解説した。

また、近年注目されるようになった反転授業について、実施の方法やアメリカなどで報告されている学習効果についても説明した。さらに、本学が導入している e ポートフォリオシステムに関する講義を行った。

「(6) 体験 模擬授業の実施と解説」では、ADDIE モデルを紹介し、参加者が自身の授業について、分析、設計、開発、実施、評価の各段階において取り組んでいることや、今後取り組むべきことをまとめるワークを実施した。また、実際に教育改革推進部門の川瀬教員が 10 分間の模擬授業を実施し、模擬授業の中で実践したワークや使用した教材に関する理論的説明を行った。

「(7) 講義・ワーク 授業計画」では、これまでの講義やワークを踏まえて、参加者があらかじめ準備して持参したシラバス、授業計画書の検討・修正を行った。その後、参加者間でシラバスを交換して相互にチェックを行った。最後に、2 日目に実施する模擬授業の説明を行った。

【2 日目】

「(8) 模擬授業実施(グループで実施)」では、参加者やスタッフがグループごとに各講義室に分かれて、参加者全員が模擬授業を実施した。各グループには FD 委員会の教員、総合教育センター教育改革推進部門、ICT 活用教育部門の教員がコンサルタントや司会者として入り、支援を行った。模擬授業の手順は、はじめに参加者が模擬授業を実施する授業のシラバスと授業計画書を説明し、その中からある部分の 15 分間を切り取り、その授業を実施した。模擬授業の様子を撮影し、その後の授業検討会で視聴しながらフィードバックを行った。参加者は学生の立場から模擬授業に参加した後、授業を検討するための要点チェックリストに基づき授業の検討を行った。この他にも良かった点、より良くするための提案について自由記述形式で用紙に記入し、模擬授業実施者へのフィードバックを行った。授業検討会は、参加者がお互いに良い点、改善点について話し合いながら評価し合う活動として行われた。

「(9) 模擬授業の振り返り」では、参加者がワークシートをもとに自身の模擬授業を省察し、グループのメンバーからもらった意見をまとめ、今後のアクションプランを作成した。最後に、各グループから 1 名が、研修で学んだことやアクションプランを紹介し、全体での共有を行った。

「(10) プログラムのまとめ」では、赤池 FD 委員会委員長による講評、教育力開発コースや全学 FD 推進プログラムの紹介とおわりの言葉によって締めくくられた。

c. 成果と課題

■プログラムの到達目標に関する成果

【到達目標①：FD 活動の理念、活動計画を理解することができる】

FD 活動の理念、活動計画に対する理解については、「(1) オリエンテーション」での高石副学長による挨拶において、徳島大学の教育改革や FD について説明があり、赤池 FD 委員会委員長による「研修のねらいと意義」において、全学的な教育方針、全学 FD プログラムの目的とその意義、教育力開発コース、本ワークショップの目的、意義について説明があった。また「(10) プログラムのまとめ」において、授業コンサルテーション、ティーチング・ポートフォリオ作成ワークショップについての説明もあった。これらの活動により、参加教員は徳島大学の全学 FD 活動について概ね理解することができたと思われる。

【到達目標②：授業を計画し、実施し、評価する方法を体得することができる】

授業計画、評価の方法については、目的・目標の設定、評価の仕方を学び、チェックシートをもとに、自身の授業におけるシラバスの修正を行った。また、アクティブ・ラーニングの理論や特徴を踏まえてワークを行うことで、より具体的に授業設計に関するポイントを押さえることができたのではないだろうか。また、学生の主体的な学習を促進するという視点から、さまざまな授業の方法に触れ、教育改革推進部門の教員による模擬授業において、参加者自身が体験しながら理論を学ぶことができ、自身の授

表 1 2015 年度授業設計ワークショップ日程

第 1 日 (2015 年 6 月 20 日・土曜日)

場所：総合科学部地域連携プラザ 2 階 地域連携大ホール (けやきホール)

時刻	内容	講師・担当者
9:00-9:30	受付 (地域連携大ホール・けやきホール)	-
9:30-10:00	(1)オリエンテーション ・はじめに (副学長より挨拶) ・進め方とスタッフ紹介 ・研修のねらいと意義	吉田 博 (進行) 副学長 (教育担当) 高石喜久 FD 委員会委員長 赤池雅史
10:00-10:30	(2)アイスブレイク「課題・目標設定」 ・参加者自己紹介・交流	上岡麻衣子
10:30-11:20	(3)講義・ワーク「アクティブ・ラーニング」 ・アクティブ・ラーニングの理論と効果 ・学生の深い学びを促す問いかけ	久保田祐歌
11:20-12:00	(4)講義「成績評価の仕方」 ・成績評価の意義・方法	川野卓二
12:00-13:00	休憩 各自で昼食	
13:00-14:50 <40分間をきむ>	(5)講義・ワーク「よりよい授業実施のために」 ・学生の学習を促す授業方法 ・反転授業の理論と実践 ・学習を省察するポートフォリオの活用 ・シラバス・授業計画書の書き方	吉田 博 金西計英 宮田政徳
14:50-15:00	休憩	
15:00-16:00	(6)体験「模擬授業の実施と解説」 ・模擬授業の実施 ・学生の主体的な学習を促進する授業方法	川瀬和也
16:00-16:10	休憩	
16:10-17:45	(7)講義・ワーク「授業計画」 ・模擬授業の実施 ・シラバス・授業計画書の修正 ・2日目の模擬授業の進め方について	宮田政徳 スタッフ全員
18:00-20:00	交流会 (任意参加)	

第 2 日 (2015 年 6 月 21 日・日曜日)

場所：共通教育 4 号館 202 講義室 他 (集合後、模擬授業を実施する教室へ移動)

時刻	内容	講師・担当者
9:00-9:30	・集合、模擬授業準備 (教材印刷が必要な場合は 9:00 集合)	スタッフ
9:30-12:10	(8)模擬授業実施 (グループで実施) ・FD 委員紹介、流れの確認 【模擬授業の流れ】(1人 25 分×4人 (休憩適宜)) ・シラバス・授業計画書等の紹介 (5 分) ・模擬授業の実施 (15 分)	各班司会：FD 委員 ワーク支援： スタッフ全員
12:10-13:10	休憩 各自で昼食	
13:10-13:40	(9)模擬授業の振り返り ・模擬授業検討会を受けて授業の改善点 ・今後のアクションプラン	川野卓二 吉田 博
13:40-14:20	(10)プログラムのまとめ ・講評 ・教育力開発コースの意義・内容 ・修了証書授与 ・アンケート ・おわりの言葉	吉田博 (進行) FD 委員会副委員長 大橋 守 FD 委員会委員長 赤池雅史

業の目的に沿った適切な授業方法を知ることができたと推察できる。この点については、d. アンケート結果に掲載している通り、自由記述からも読み取ることができる。

【到達目標③：授業研究の仕方を理解し、実践することができる】

模擬授業の計画と準備、模擬授業の実践を通して、評価視点のポイントを示しながら、相互評価を行うことで、その理解が促されたと考える。模擬授業実施では、授業を実践するために必要な評価視点 (枠組み) を伝えた上で、相互評価を行う機会を設けたため、体験的に授業研究の方法について理解できたと考える。また、映像のフィードバックを用いて支援スタッフが関わることで、「授業コンサルテーション」への継続を意識した形で授業検討会を実施した。アンケートから、ワークショップに参加して良かった点を記載する項目では、模擬授業や授業検討会が良かったと挙げた参加者が多い (d. アンケート結果)。また、「受講したことによって教育への取り組み方が改善されると思うか」という設問では、9 割以上の参加者が肯定的な回答をしていることから、研修後の授業実践に繋がる成果を得ることができたと推察できる (図 1)。

【到達目標④：FD 参加者同士の仲間づくりができる】

ワークショップ全体を通して、できる限り相互交流の機会を設け、お互いに研鑽し合う関係性の構築を意識した。具体的には、アイスブレイクで、お互いの授業等について情報共有する機会を設けたこと、各セッションのワークでは、授業に対する考え方を相互に理解するための機会を設定したことが挙げられる。2 日目には模擬授業を実施し、お互いの授業から学びつつ、相互に高め合う相互研鑽の関係性の構築を促す機会を設け、最後にグループ単位でワークショップ全体を振り返りながら気軽に話し合う機会を設定した。アンケートの「新たに人的なつながりをつくることができたか」という設問においては、75%以上の参加者が肯定的に評価しており、関係性の構築という視点からは、本ワー

クショップの成果があったと考えられる (図 1)。

■研修全体の成果と今後の課題

アンケートの設問「授業設計ワークショップは自分の業務に活かせる内容だった」、「授業設計ワークショップは全体的に満足できるものであった」、「授業設計ワークショップは期待を上回る内容だった」、「今後も、この授業設計ワークショップを継続していくべきだと思う」では、すべてにおいて 8 割以上の参加者が肯定的な回答をしていることから、本ワークショップは参加者にとって有意義であったことが伺える (図 1)。また、本ワークショップの主目的である授業設計に関連する項目では、授業の新しい方法や理論を知ったり、自身の授業を見直すきっかけになったり、改善点に気づくことができたことなどがアンケートの自由記述からわかる (d. アンケート結果)。特に、模擬授業を通して、相互の授業技術の共有や自身の課題に気づくことができたことが推察できる。

一方、アンケートから今後のワークショップを実施する上で検討すべき課題についても明らかになった。授業では e-learning の活用や反転授業が進められている現在において、本ワークショップも資料の事前配布など、工夫できる点があると考えられる。また、改善点として、ワークショップのスケジュールや日程に関する意見が多く挙げられている。内容を厳選することは、引き続き検討すべきであるが、我が国の FD の現状や、ワークショップの意図説明を強化する必要がある。2015 年度のワークショップでは、アンケートの肯定的な回答の割合が減少している。参加者数が大幅に増加したことなどの要因もあると考えられるが、引き続き、参加者の声を真摯に受け止め、ワークショップの質向上に努めていく必要がある。

d. アンケート結果

最後に、プログラム終了直後に実施したアンケート結果について、自由記述の「参加して良かったと思われる点」の回答を示す。ただし、重複がある内容は統合し、表現を一部修正している。() は回答があった数を表している。

◆他の教員の授業を聞くことができ、参考にな

- った・刺激・非常に良い経験になった。(11)
- ◆自身の授業を他者に見てもらうことができコメントをもらうことで、自身の授業を客観的に振り返る、あるいは見直すことができた。(10)
- ◆色々な授業手法や自分が試してみたい授業方法、数年後に取り入れたい授業方法を知る事ができた。(6)
- ◆授業改善のヒントを得た。特に授業の目標を学生に意識させること、EQ トーク、反転授業の実施など。(3)
- ◆Active Learning などの授業方法と理論を学ぶことができた。(2)
- ◆学部が異なると、教育に対する思想が違うということが分かった。(1)
- ◆目標・目的の明確化、シラバスの書き方が分かった。(2)
- ◆新しい取り組みを行う意欲がわいた。(1)
- ◆教育の方法論について体系的な話を聞くことができた。(1)
- ◆大学教育というものの認識、理解ができた。(1)
- ◆教員間のつながりができた。(1)
- ◆プレゼンテーションについて新しい知見を得る事ができた。(1)
- ◆自分が受けてきた「授業」が最早通じないということが明瞭になった。(1)

(吉田 博)

4. 授業コンサルテーション

a. 授業コンサルテーションの目的

徳島大学では、全学 FD 推進プログラムの一環として、授業コンサルテーションを 2005 年度より、「授業コンサルテーション・授業研究会」という名称で実施している。授業コンサルテーションでは、個々の教員の実情に沿った具体的に日常的な FD をめざしており、その目的は、授業の把握、授業の改善、参加者間での授業技術の共有化である。

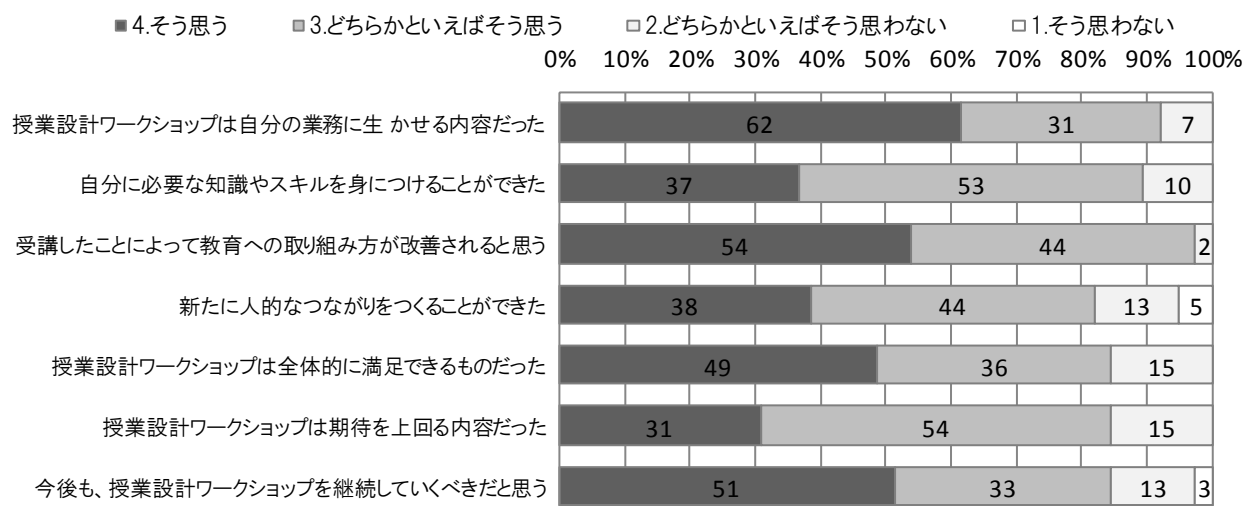


図1 2015年度アンケート結果

b. 授業コンサルテーションの概要

■実施方法

授業コンサルテーションは、次のように実施している。

授業への参観・映像撮影・学生アンケートの実施

↓

学生アンケート整理・映像編集

↓

授業研究会（発表・映像視聴・議論）

まず、センター教員と撮影担当者が、各教員の授業を参観し、簡単なメモ（授業内容のまとめ、時間経過、特筆すべき発言や出来事）をとりつつ、授業を映像に収める。授業終了時には、学生へのアンケート（その日の授業で何を学んだかということ、授業に関する先生へのメッセージについて）を実施する。さらに時間があれば、教員に授業に関する簡単なインタビューを行う。

その後、授業映像をもとに、センター教員が授業の主要部分を考慮し、授業研究会においてどの時間帯の映像を視聴するかを決定する。さらに、授業参観より一週間以内に、編集映像、学生アンケートの結果をもとにした「授業研究会」を開催する。そこでは、様々な部局からの参加者を交えて、授業改善の知恵を出し合い、また授業からいろいろなことを学び合うことを目指した。

c. 授業研究会

授業研究会は以下のような手順で進めた。所要時間は全部で1時間ほどである。これも昨年度よりやや短縮した。

簡単な説明（授業全体のねらい／この日のねらいなど：対象者の先生より5分）

↓

授業映像視聴（15分）

↓

授業参観者報告・学生アンケートから読めること（総合教育センター教員より5～10分）

↓

授業者解説（当日の様子／授業でうまくいっている点・お困りの点など各論：対象者の教員より5～10分）

↓

自由討論（10～15分）

■受講対象者

受講対象者は、授業設計ワークショップを受講した教員、および希望者である。ただし、授業設計ワークショップと異なり、学内の教員のみを対象としている。また、昨年度までに授業コンサルテーションの対象となり、日程が合わない等の理由で本年度の実施を希望した教員についても、本年度の受講対象者となる。

また、参観者・研究会参加者として、希望する全学の教員の参加を受け付けている。これに

より、学部との連携を行いつつ、専門的な立場から教員が参加する形となり、専門的な視点からも議論する体制を実現している。

■受講者

本年度は、過去最多の 32 名の教員の授業を対象に、授業コンサルテーションを実施した。授業実施教員、および実施日等の詳細は表 2 の通りである。なお、教員の所属については、授業との対応がよりわかりやすくなるよう、大学院ではなく学部による表記を基本とした。

d. 授業研究会実施報告

以下では、各回の授業研究会の様子について簡単に報告する。授業参観・研究会のより詳しい様子については、FD 推進プログラム web サイトにおける実施報告ページに掲載している (<http://www.tokushima-u.ac.jp/cue/fd/>)。

●第 1 回：土屋敦先生

・授業名：「生命倫理と現代社会 II」

この授業では講義に加えて VTR 視聴やグループディスカッションが取り入れられていた。参観時は 4 回のグループディスカッションの 2 回目、脳死の小児の臓器移植の問題が扱われた。ディスカッションを行う前に、事例の説明とディスカッション論点の説明があり、その後 15 分ほどの教材用に作成された事例の VTR を視聴し、その後 20 分間グループディスカッションを行い、最後に各グループからの発表がまとめられ、先生からの適切なコメントがあった。

授業研究会においては、グループで話し合う時間を増やすため、論点はできるだけ絞った方がよいのでは、という意見が出されていた。またグループで発表する人を決めていたので、グループの意見がその人の意見に偏りがちではないか、との指摘もあった。またグループワークでは早く終わってしまうグループがあるので、そういうグループには自分達の意見を板書させたら、先生が最後にパワーポイントに意見を打ち込む手間が省けるのではないか、というコメントも聞かれた。

●第 2 回：竹林桂子先生

・授業名：「助産実践学演習 II」

この授業では助産診断・ケアを自律して実践

するための演習が行われている。学生はグループになって事前に妊産褥婦の退院指導と家族計画指導案を先生に提出し、当日はその指導案を基に追加修正する点をディスカッションした。学生アンケートからは、先生からのコメントが非常に有益だったという意見が多く、先生の適切な助言が効果的だったことがうかがえる。

自由討論では、ディスカッションがあまり活発でなかったのも、先生からの問いかけをもう少し絞って聞けば多くの意見が出たのではないか、という意見が出された。また授業中ロールプレイして、指導者側と指導される側の妊産褥婦の場面をシミュレーションしたら、もっと実践的になるのではないかと、との指摘もあった。

●第 3 回：小野寺睦雄先生

・授業名：「人工呼吸管理」

この授業は、講義の中に学生との質疑応答を交える形で行われた。実際に人工呼吸管理に触れた経験のない学生にも分かりやすいよう、要点をできるだけ絞って工夫した授業がなされていた。

自由討論では、短い講義時間のなかで、学生にいかにして伝えたい内容を身につけさせるかということや、必ずしも人工呼吸を専門に扱うわけではない学生に何を学ばせるべきかといった内容が話し合われた。専門外から見た提案も交えて、目的・目標を実現するための授業内容の厳選についての意見交換がなされていた。また、階段教室型の大きな講堂であるという困難がある中、学生に積極的に話しかける等の工夫をさらに発展させて、全員が参加できるアクティブ・ラーニングをどうすれば取り入れられるかといったことが話題となった。

●第 4 回：大野恭秀先生

・授業名：「ナノエレクトロニクス特論」

この授業では、学部内容の復習も取り入れ、理解度をチェックするための計算問題を行いながら解説を進めている。また、さまざまな分野の大学院生が履修していることから、大学院における研究のサポートになる内容を取り扱うことも、もう一つの目的として授業を実施されて

いる。そのため、授業では先端研究の話題がいくつか紹介されたり、先生自身が行っている研究内容を紹介する回を設けたりしている。また、最新の論文を取り扱ったレポート課題を課している。

自由討論では、学生の学習に対する取り組み方や学生が求めているものについて意見交換が行われ、学生のためになる授業の在り方や修士課程の学生として最低限身に付けておくべきことなどを共有した。

●第 5 回：米村重信先生

・授業名：「基礎生物学 M1」

この授業は、医学科の 1 年生を対象とし、医学の専門教育を学ぶにあたって必要な、医学に関連したライフサイエンスの基本について理解し、将来臨床医学や基礎医学研究の基礎を身につけることを目的に実施されている。当日の授業では、細胞間の情報伝達のシグナルの種類と伝達の方法が講義された。先生の授業の特徴は講義だけでなく、事前に iCollabo などを使って、教科書の『エッセンシャル細胞生物学』からの課題を学生に与え、当日発表させていた。毎回 10 人ほどに発表させ、先生からのコメントが述べられていた。

自由討論は学生からの授業に関するアンケートを中心に行われた。学生が発表することはおおむね好評だが、「予習して授業に臨むので理解しやすい」という意見と、「発表する学生以外は事前学習して来ないと分かりづらい」という意見も見られた。どのように全員に事前学習させるかが課題となった。その解決策として、できるだけ沢山の学生に発表させ、学習させるには 4~5 人のグループを作って、各グループに発表させたら皆が責任を持って学習し、発表するのではないか、という意見が出された。

●第 6 回：橋本浩子先生

・授業名：「小児援助論」

この授業は、授業で取り上げる内容を記した配布資料が配られ、それと対応する内容の PPT スライドを利用しながら進められた。配布資料には、ところどころに空欄があり、授業を聞きながら穴埋めが行えるように工夫されていた。

授業の中ほどで、事例が提示され、学生間での話し合いが行われた。

授業研究会では、アンケートに記された学生の声を中心に話し合いが進められた。学生の理解度は 10 段階中 7.78 と高く、この授業が学生にとって満足度の高いものになっていることが伺える。学生の中には、スライドを進めるスピードが速いと感じている学生が多いことに関してどのように対応できるか、配布資料とスライドとの対応をどのようにして確保できるか等について議論された。

●第 7 回：久田旭彦先生

・授業名：「基礎ゼミナール」

この授業は、「科学」を題材にして、他者と協働して企画を立て、実践する中でコミュニケーション能力を育成することを目的にされている。具体的な最終目標は、学生 4 人 1 組のチームを作り、「あすたむらんど徳島」にて開催するイベント「夏休み特別企画 徳大生と自由研究を考えよう！」において、小学生を相手に科学実験やその解説を行うことである。久田先生は、社会人としての基本的なマナーやコミュニケーションの基礎、プレゼンテーションの仕方などを指導し、企画作りにおいては学生自身が関係機関とやり取りを行い、主体的に企画を作り上げていけるように授業を構成している。各チームともに、全員が何らかの役割を担うようにし、企画シートに詳細をまとめさせている。また、毎回の授業終了時には自己評価シートを作成させ、進捗状況を把握している。授業参観を実施した日は、学内試行回の 1 回目であり、3 チームの発表が行われた。先生は各チームの発表に対して、学生とやり取りを行いながらフィードバックを行っていた。

自由討論では、評価の仕方やチームの組み方などについて意見交換が行われ、プロジェクト型の授業の難しさや、実施する際に気をつけるべきことなどを共有した。

表2 授業コンサルテーション対象教員・実施日の詳細

回数	氏名	所属	職名	参観実施日	研究会実施日
1	土屋 敦	総合科学部	准教授	6月2日	6月8日
2	竹林桂子	医学部	講師	6月15日	6月23日
3	小野寺睦雄	医学部	講師	6月30日	6月30日
4	大野恭秀	工学部	准教授	7月7日	7月7日
5	米村重信	医学部	教授	7月3日	7月9日
6	橋本浩子	医学部	准教授	7月6日	7月14日
7	久田旭彦	総合科学部	講師	7月10日	7月14日
8	Omar Marianito Rodis	歯学部	講師	7月16日	7月24日
9	山本 圭	生物資源産業学部 (仮称)設置準備室	准教授	7月27日	8月3日
10	西庄俊彦	医学部	講師	9月14日	9月28日
11	西出 俊	工学部	講師	10月23日	10月23日
12	増田清士	医学部	准教授	10月28日	11月2日
13	奥村仙示	医学部	講師	10月29日	11月4日
14	石上安希子	医学部	講師	11月5日	11月11日
15	Olaf Schiedges	総合科学部	准教授	11月6日	11月6日
16	中里見博	総合科学部	准教授	11月9日	11月9日
17	田中 佳	総合科学部	准教授	11月16日	11月16日
18	岡本敏弘	工学部	准教授	11月18日	11月18日
19	吉田 健	工学部	講師	11月19日	11月19日
20	水科晴樹	工学部	講師	11月20日	11月25日
21	佐原 理	総合科学部	准教授	11月25日	12月2日
22	櫻井信之	総合科学部	講師	11月25日	12月2日
23	大倉一夫	歯学部	講師	11月26日	11月26日
24	上岡義典	総合科学部	教授	11月30日	12月7日
25	安倍吉郎	医学部	講師	12月3日	12月10日
26	工藤保誠	歯学部	准教授	12月8日	12月8日
27	岡村裕彦	歯学部	准教授	12月9日	12月11日
28	服部恒太	総合科学部	講師	12月11日	12月16日
29	河内亮周	工学部	講師	12月14日	12月14日
30	富田卓朗	工学部	准教授	1月21日	1月21日
31	新垣理恵子	歯学部	准教授	1月29日	1月29日
32	六車直樹	医学部	准教授	2月18日	2月23日

●第8回：Omar Marianito Rodis 先生

・授業名：「アカデミックプレゼンテーション」

この授業は、大学院口腔科学教育部の大学院生が専門内容を英語でプレゼンすることを目指した授業である。プレゼンの仕方は口頭発表とポスター発表に分けてそのポイントを講義し、授業後半では院生が実践形式でプレゼンする。参観した授業では、代表の院生が自分の研究内容を英語で口頭発表した。授業計画は緻密で、先ず院生のプレゼン（6分間）があり、それをビデオで撮影した後ビデオを再生し、その後発

表以外の学生を良い点をコメントするグループと悪い点をコメントするグループに分けて、それぞれのグループの意見を発表させて確認し、最後に発表者が各グループからのフィードバックを得て、もう一度プレゼンをやり直すというものであった。

学生からの授業に関するアンケートが紹介され、英語でプレゼンをすることには、刺激になって勉強になるので良いという意見と、専門用語は英語では聞き取り難いので日本語も交えて欲しいという意見があった。総合教育センター

教育改革推進部門教員からの質問では、この授業はプレゼンの仕方を学ぶのか、それとも英語を喋ること、どちらを目指しているかが問われた。それに対して Omar 先生はあくまでも「英語でのプレゼン」にこだわり、プレゼンを英語でやることで院生が将来国際学会での発表ができるようになって欲しいという考えであった。

●第 9 回：山本圭先生

・授業名：「生体組織工学」

この授業は、工学部生物工学科の 2 年生を対象に医療工学の基礎となる細胞の構造、組織の成り立ち、器官構造を理解し、それらの機能を理解することを目的とされている。当日の授業では、第 2 クォーターの授業として、8:50~11:55 まで休憩を挟みながら、消化器系と泌尿器系の構造と機能が講義された。

授業の最初に前回の理解度を測るため小テストがあり、その後学生は講義では、穴抜きの PPT 資料にキーワードを書き込み、同時に講義ノートを取っていた。

自由討論は学生からの授業に関するアンケートで指摘されたことを中心に行われた。小テストの範囲が広すぎて難しいという意見や、スライドの進行が速すぎてついていけない、等の意見が散見された。2 時間続きの授業なので、先生は学生の集中力を切らさないように、時々学生を指名したり、エピソードを挟むなどしていた。授業内容が多すぎたり、速すぎたりしてついていけない学生には、iCollabo を使って授業をアップして復習させたらどうか、という意見も出された。

●第 10 回 西庄俊彦先生

・授業名：「骨・軟部腫瘍」

この授業は、医学科 4 年生に、骨・軟部腫瘍に対する理解を深めるために、骨・軟部腫瘍の概要と診断、治療について、スライドを用いながら、分かりやすく学生に講義されている。先生の授業の特徴として、授業の導入部分で、事前に配布した症例の診断について、学生に質問し、事前の理解度を確認したり、60 分授業の真ん中辺りで、今まで学修したことの振り返りを行い、授業の最後で確認テストを行うなど、知

識の定着を図るために工夫された授業であった。学生にも積極的に質問し、双方向的な授業が展開されていた。また、授業が終了してからも、学生の質問に答えるなど、学生とのコミュニケーションを大切にしていることが感じられた。

自由討論は、学生からの授業に関するアンケートを中心に行われた。授業理解度の平均は 10 段階中 8.1 と高く、「重要な部分が強調されていて分かりやすかった」という意見が多く見られた。

●第 11 回：西出俊先生

・授業名：「グラフ理論」

この授業は、離散数学の一分野である「グラフ理論」について、理論の理解と、応用力を身に付けることを目的にされている。この授業は知能情報工学科の学生にとって、さまざまな分野の基礎にあたる科目である。授業の最後 15 分間は、授業で学習した内容の振り返りと定着のために、毎回小テストを実施し、次の授業の冒頭で解説を行っている。また、小テストは学生の学習内容の定着を促進するだけでなく、先生が学生の理解度を把握し、次の授業に繋げる役割も担っている。

自由討論では、大人数の授業において、学生の参加を促し、授業中に学生とやり取りを行う方法について、アイデアが共有された。また、授業外での学習をうまく設計することで、授業内容の厳選を行い、授業構成を工夫できる点についても話し合われた。

●第 12 回：増田清士先生

・授業名：「学校保健・感染症」

この授業は、医学部医学科の 3 年生を対象としており、【公衆衛生総論及び各論】の中の「感染症と学校保健」に関するものである。授業の目標は①感染症の分類・発生時の対応について説明出来る。②学校保健の概要・意義について説明できる、の 2 つであった。当日の授業では、パワーポイントを投影しながら講義し、学生は話を聞きながらパワーポイントの配布資料の空所部を埋めていくやり方であった。

自由討論では学生からの授業に関するアンケートで指摘されたことを中心に行われた。配付

資料に関しては、穴埋め部分の余白が狭かったり、正解の色が見にくかったりしたが、概ね字の大きさや穴埋めの数は丁度よいと好評であった。課題としては、授業内容のデータが最新のものでなかったため、アップデートして欲しいとか正解が入った配付資料をネットに上げて欲しい、等があった。授業改善としては、内容が多すぎるので授業では最低限に絞り、その他の部分は学生に予習や復習で確認させたらどうか、また、学生に質問した場合は指名しなくてもすぐに答えを言わずに学生に考える時間を与えたらどうか、という意見が出された。

●第 13 回：奥村仙示先生

・授業名：「病態栄養学実習」

この授業は、管理栄養士として必要な、患者に適した栄養補給によって治癒を促進する食事のための知識と技能を身につけることを目的にされている。授業では、調理実習を軸に、治療食に関する理論的な事項や、食材に関する知識等の講義形式で知識についても確認し、さらに調理の結果に対するフィードバックも合わせて実施されている。

自由討論では、学生アンケートの結果をもとに、講義と実習を組み合わせることで栄養士としての総合的な知識・技能を養うという授業の目的を、学生に伝達することの重要性について話し合われた。また、施設面での制約がある中で、講義と実習を組み合わせた授業を実施するための工夫について議論された。

●第 14 回：石上安希子先生

・授業名：「法医学」

この担当授業は、医学部医学科の 3 年生に【法医学 (42 時間)】の中の「個人識別 (3 時間)」に関するものである。授業の目標は①個人識別の必要性について説明できる。②個人識別の方法、物体検査の種類と方法、人獣鑑別について説明できる、の 2 つであった。

当日の授業では、個人識別の導入のため学生に「あなたの特徴」について書き出してもらい、個人を同定するためにどのようなものが手がかりになるのか考えてもらい、その後はパワーポイントを投影しながら個人識別の方法について

講義された。

自由討論では学生から授業に関するアンケートで指摘された点で、配付資料の図が小さすぎて見にくかったことを改善するため、1 頁 6 枚を 4 枚にしたら良いのではないかと、配付資料を大きく見られるようネット上に上げたらどうかという意見が出された。また、3 時間連続の授業なので、学生の集中力を持続させるため、パワーポイントの間に動画を入れたり、検査方法では実物の検査キットを見せたり、配付資料の重要な処を穴埋め式にして書かせたりしたらどうかという意見が交換された。学生からの授業評価が良かった点は、話し方が丁寧でゆっくりして聞きやすい、とか、法医学を現場で活かした体験談として「東日本大震災」での身元確認の活動が興味深かったという意見があった。

●第 15 回：Olaf Schiedges 先生

・授業名：「ドイツ語入門」

この授業では、学生がドイツ語に親しみをもって学ぶことを重視し、ペアワークやゲームの要素を多く取り入れた工夫が実施されている。参観した授業でも、インフォメーション・ギャップを活用したペアワークが準備され、学生たちは楽しみながらドイツ語を学んでいた。

自由討論では、学生アンケートの結果から、学生が授業を楽しんでいることが確認できた。一方で、LMS の Moodle で準備された課題に取り組んでいる学生が少ないなど、授業外での学習や、ドイツ語そのものの理解を深めるという点では難しい点もあるということが話題になった。学生がドイツ語を学ぶモチベーションやドイツ語に対する興味を高める方法について、議論が交わされた。

●第 16 回：中里見博先生

・授業名：「憲法と人権」

この授業は、工学部夜間主コースの学生を対象とした教養教育の授業で、我が国の憲法である「日本国憲法」について、さまざまな視点から考察することで、自身の考えを深め、市民としての教養を身につけることを目的にされている。初めの授業で詳細なシラバスを配布し、授業の目的や授業のスケジュールを明確に説明さ

れており、レポートの書き方も丁寧に説明されていた。参観した授業では、日本国憲法と自由民主党の改憲草案(2012年4月)を比較して、学生同士の議論や先生の解説が行われた。

授業研究会では、学生同士のグループ討論を活性化するための方法について意見交換を行った。人数や教室環境に応じて工夫できる点などが共有された。

●第 17 回：田中佳先生

・授業名：「フランス語初級」

この授業では、授業開始時から挨拶、曜日、日時の確認などを、フランス語を使って学生と会話をしながら進められた。また、数名の有志の学生からフランス語圏に関わる新聞記事を紹介してもらい、他の学生と共有していた。その後、文法事項を整理したプリントを使って詳しく説明し、学生が練習問題を前に出て解いた後でさらに先生からの解説があった。また、ペアシェアの方法による学習も行われていた。

授業研究会では、アンケートに記された学生の声を中心に話し合いが進められた。また、この授業で採用されている、2 コマある形態の授業を効果的に行う方策について話し合われた。

●第 18 回：岡本敏弘先生

・授業名：「光デバイス」

この授業は、学生が実際に手を動かして図を書くことが深い理解を促すという狙いから、パワーポイントではなく、板書を中心に構成されている。一目で重要な箇所が分かる板書の高い技術を磨かれている。また、授業のテーマであったレーザーダイオード(LD)の現物の提示や、授業終了時のアンケート実施を通じて、学生がさらに理解を深められるような工夫がなされていた。

自由討論では、学生アンケートの結果から、学生にも板書が好評であることが確かめられた。一方で、先行する科目の理解が十分でない学生が、授業に追いつくのに苦労していることもわかった。限られた時間の中で、理解度にばらつきのある大きい学生たちにどのような教育を施すことができるかについて議論が交わされた。

●第 19 回：吉田健先生

・授業名：「物質機能化学演習」

この授業は、化学応用工学科の学生を対象とする専門の科目で、同じく後期に開講されている「基礎物理化学」で学生が学習した内容の理解をさらに深める内容となっている。参観した授業では、事前学習として教科書で予習をさせた上で演習問題を学生に解かせ、数名の学生に板書させた後で、先生が問題の解答について詳しく説明されていた。

授業研究会では、学生に解かせる演習問題の適切な設問数や実施時間、学生が考えればできるような問題にいかにつまづいて出題するかについて意見交換を行った。また、事前学習を学生に指示する際に、演習問題の出題範囲を細かく絞るべきかについて議論が行われた。

●第 20 回：水科晴樹先生

・授業名：「電子回路」

この授業は、光応用工学科の学生にとって重要な科目で、電子回路の基礎を習得することが求められている。授業中での理解を促進するために、毎回の授業終了時に次の授業の内容について予習すべき点を伝え、授業の冒頭では全員の予習ノートをチェックし、確認テストを実施して学習状況や理解度を把握されている。講義では、予習を前提に学生を指名して発言をさせながら、要点を絞って解説をされている。学生アンケートからは、予習をすることで講義内容が理解しやすいという意見が挙げられていた。

自由討論では、スライドの見せ方や配布資料の扱い、確認テストのフィードバックの仕方などについてアイデアが共有された。

●第 21 回：佐原理先生

・授業名：「美術科教育法 I」

この授業「美術科教育法 I」は、総合科学部地域創生コースの学生に開講されている科目である。今年度は2年と4年の学生2名が受講している。当日の授業の目標は、①美術科の目標、学習指導要領ができるまでを理解する、②自身の授業案を考案し、次回の授業方法論に発展させるアイデアをつかむ、であった。授業の流れは、先ず鶏の絵を描いてもらい、それをどう評価するかを考えることから始まり、子どもなり

の視点、または大人でも様々なものの見方、意見を許容していくことが望ましい社会であり、美術教育の原点でもあることが示された。その後美術科の学習指導要領がどのようにして出来たか、小学校から高校までの図画工作科・美術科の学習目標の相違点と段階別の主目的の変遷が示された。授業後半は、2 人の学生が作ってきた年間の美術科の指導案をプレゼンし、それに対して先生から枠組みに沿った授業改善ポイントの指導があった。

自由討論では、先生がかなり時間をかけてカラフルで綺麗なパワーポイントを作成されていることや、パワーポイントに頼るだけでなく、学生にどんどん質問して授業を進めていくことを心がけていることが紹介された。また学生との授業に関する連絡をラインで行っていることで成功していることも紹介された。改善する点では、学生がプレゼンするやり方にやや手間取ったので、事前にどういう形でプレゼンをするのかをしっかりと確認しておくことが必要ではないか、という意見があった。

●第 22 回：櫻井信之先生

・授業名：「基礎物理学実験」

この授業は、医学部医学科と歯学部歯学科の共通教育基礎科目群のうちの選択科目である。参観した授業では、次週の実験実施に向けて、実験の仕方やレポートの書き方について説明が行われた。先生は実験の解説の後で、事前学習をさせた課題の解答を学生に板書させ説明させながら解法を示唆することで、学生の理解を促していた。学生アンケートからは、人に自分の考えを伝えられる能力が必要だと感じたという感想も見られた。

自由討論では、学生に板書した解答を説明させる際、言葉につまる場合には、学生が話し出すのをどれくらい待てばよいのか、90 分の授業において緩急をつけるにはどのような工夫が必要か等についてアイデアが共有された。

●第 23 回：大倉一夫先生

・授業名：「歯科補綴学 (2) A」

この授業は、歯科補綴学に関する基本的な内容を修得することを目的としており、授業の一

部に TBL (Team Based Learning) を導入し、学生が協働して課題に取り組む中で理解を深められるように工夫をされている。授業を参観した 11 月 26 日は、国家試験に出題された問題をもとに、問題を個人で考え、グループで議論し、先生の解説を挟みながら、最後にグループで応用課題に取り組み、学生はピア評価を行った。先生の解説の際には、「なぜそのような解答になったのか」など、学生に問いかけながら双方向の授業を展開されていた。また、予習を前提とした授業構成のために、学生アンケートからは、予習を行って来ることやチームでの学習によって理解が促進されていることが伺えた。

自由討論では、TBL で取り扱う問題以外の内容をいかにしてカバーしていくのか、ピア評価を行う際の基準などについて意見交換を行い、いくつかのアイデアが共有された。

●第 24 回：上岡義典先生

・授業名：「心理学要説」

この授業では、まず前回の振り返ることから始められた。学生からのコメントや質問に丁寧に答え、内容をより深く理解する助けになっている。授業では、話される内容の一部をまとめた資料が配布されており、授業で用いる PPT では、資料に載せられている箇所とそうでないところが分かりやすくなるように色分けされていた。授業の終盤で、十分に時間をとって振り返りの機会が持たれていた。

授業研究会では、学生からのアンケートに記されていた、スライドで次ページに進むスピードについて、また、授業のなかで双方向性の学習を確保する方法についてなども話し合われた。

●第 25 回：安倍吉郎先生

・授業名：「形成外科学」

この授業は、医学部医学科の必修科目である。参観した授業では、医療には正解がないこと、教科書は現在の到達点が示されたものであり、最低限の知識を踏まえた上で応用できるようになって欲しいということが冒頭で述べられた後で、熱傷についての講義が行われた。授業構成としては、国家試験の問題を提示された上で、形成外科の臨床写真を豊富に用いた説明が行わ

れ、学生が授業の終わり頃には提示された問題の答えが分かるように組み立てられていた。

自由討論では、ハンドアウトだけでなくスライドも欲しいという学生に対して、どのような対応を行うことが学修の促進につながるのか、講義で画像を多用する際の注意点等についてアイデアが共有された。

●第 26 回：工藤保誠先生

・授業名：「口腔病理学」

この授業では、授業の理解を促進するために授業内容を詳しくまとめた配布資料があり、それにしたがって PPT で補足しながら授業が進められていた。また、国試や CBT に出たところや、実際の症例などが語られるので、学生は興味を持って聞いている様子であった。

授業研究会では、アンケートに書かれている学生のコメントを元に話し合われた。配布資料と PPT の内容をどの程度対応させるのがいいのか、また、実際の症例についてレントゲン写真を見せながら考えることの効果について議論された。

●第 27 回：岡村裕彦先生

・授業名：「解剖学 (2) AB (組織学)」

この担当授業「解剖学 (2) A・B (組織学)」は、歯学部歯学科 2 年生の学生に開講されている科目である。岡村先生は、呼吸器系、泌尿器系、生殖器系、内分泌系、循環器系を主に担当されているが、当日の授業の目標は、泌尿器系の「腎臓、腎小体、尿細管の組織学的構造と機能を理解する、並びに尿の生成と再吸収の機構を理解する」であった。授業の流れは、前回の復習～今日の講義の導入～今日の講義～今日のまとめ～小テスト～質問、と非常に分かり易い順序で進められた。講義方法は主に板書で臓器の絵を描きながら構造・機能を説明され、最後に綺麗なカラーの PPT スライドを写しながらまとめられた。

自由討論では、学生アンケートからの要望で、カラーのチョークの板書が見にくいとの指摘に対しては、柔らかいチョークでできるだけ筆圧を強く書いたらよい、という助言があった。配布プリントに関しては、学生アンケートからの

コメントで、時々どこをやっているのか分からなくなるという意見に対しては、見出しは活字のポイントを大きくしたり、重要な専門用語は太字体にしたらどうか、という助言があった。岡村先生からは、授業中教える内容を減らすためにどのような予習・復習をさせたらよいか、との質問があった。それに対しては、学生に予習・復習をしないと言ってもやらないので、何とか予習・復習をしないと行けないような仕掛けを作ったらよいのでは (例えば授業前に前回の小テストをする等) という意見が出された。

●第 28 回：服部恒太先生

・授業名：「主題別英語」

この授業で扱われているテーマは、工学的な内容を英語で読み、理解するということである。様々な理系テーマを取りあげ、海外の Web サイトから短い記事を読んでいく。内容を十分に理解できるように、課題となる記事が一週間前に配布され、その内容の理解を助ける質問 (英文) に対する答えを考えて授業に臨むことが期待されています。授業中には、記事の内容をより深く理解できるように、その記事に関連した動画を視聴している。また、服部先生は小グループを回って内容の確認をきめ細かく行っている。そして、最後に、質問の順に全体で再確認します。次週には、今回の記事に関する小クイズ (語彙と内容に関する質問で構成) が行われる。このように、1 つの内容を 3 週間にわたって学ぶことになるので、学生にとってより深い定着が図られている。

授業研究会では、アンケートにある学生からの声を中心に話し合われた。工業に関係した科学的な読み物を毎回取り扱っていることが、学生にとって授業の内容が身近に感じられるようである。また、それぞれの小グループを回って詳しく説明をしている時に、他のグループの中には、その時間を持て余している様子が見られ、発展的な課題を準備するなどの方策について話題となった。

●第 29 回：河内亮周先生

・授業名：「コンピュータネットワーク演習」

この授業では、授業で取り上げる内容を記した PPT スライドをその前週に学生が入手できるようにしてあり、学生は手元のパソコンでも内容を確認しながら授業に参加できていた。ただ、実習室に設置されている換気扇の音が大きく、河内先生が話をするときの顔の向きによって話されていることが聞き取りにくい時があり、マイクを使うなどの工夫が必要だと感じられた。授業の中ほどと終盤に、授業で取り上げた内容に関連した練習問題を考える時間が十分にあり、授業内容の定着へ工夫があった。授業研究会では、授業で用いる資料の配布のタイミング、練習問題を解くために配分する時間の長さや、学生同士で話し合いながら考えられる練習問題を作成することなどについて話し合われた。

●第 30 回：富田卓朗先生

・授業名：「電気磁気学 1・演習」

この授業は、電気磁気学に必要な基礎的事項を理解することを目的にされており、電気電子工学科の学生にとっては、どの専門分野に進む上でも基盤になる科目です。学生が理解しやすいように身近な例えを用いたり、学生が授業に集中できるように学生とのやり取りを行いながら授業を進められています。

自由討論では、先生が作成されている教材や課題などの授業設計の方法に加え、富田先生がどのような教員を目指しているのかなども共有されました。

●第 31 回：新垣理恵子先生

・授業名：「病理学 C・D 講義」

この授業は、歯学部歯学科の必修科目で、授業では豊富な映像スライドと配布資料に基づき、「加齢と口腔疾患」をテーマとした講義が行われた。授業の前半では、細胞老化と寿命や老化による歯周組織の変化、ドライマウス等の説明が行われ、授業の後半部分では、学生にスライド上で過去の試験問題を提示し、回答を学生に答えさせながら解説が行われた。授業の最後には、カロリー制限と寿命の関係に関する最新の研究成果も紹介された。

自由討論では、新垣先生から、授業で扱う

必要のある内容が多いため、授業時間に収まるような説明スライドの選定に苦慮しているという話があり、この点について学生に事前学習を促すことが解決につながるかどうか議論を行いました。その他、配布資料のプリントと学生に提示するスライドとを対応させた説明の仕方についてアイデアが共有された。

●第 32 回：六車直樹先生

・授業名：「内科診断学実習」

この授業は、医療面接や身体診察から得られる情報から、理論に基づく医療診断を行うことを目的としている。授業は①講義、②ディスカッション、③グループワーク、④プレゼンテーション、⑤振り返りから構成されていた。学生は先生から提示された症例シナリオを患者役と研修医師役と指導医師役になりグループで話し合い積極的にプレゼンを行った。

授業研究会では、学生がプレゼンする症例シナリオが一つだったので、やや最後単調になってしまったので、2~3つ違うものを使ったら良かったのではないかと、プレゼンへのコメントが先生からだけだったので、学生の相互評価として他の学生からのコメントを聞いても良かったのではないかと、という意見が出された。授業の最後での振り返りとして、授業理解のチェックリストを配り、学生の理解度を確認しているのは良いアイデアであることなどが話し合われた。

e. 授業コンサルテーションの成果と課題

授業コンサルテーションは、本年度が 11 年目であった。受講した教員は累計で 130 人を超え、授業コンサルテーションの取り組みは学内で広く認知されつつある。しかし、受講対象となり授業を実施する教員以外の、同僚教員による参観および研究会への参加者数は低調のまま推移している。昨年度 (2014 年度) に実施した受講者アンケートでも、この点を問題視する声が複数寄せられた。本年度もこの傾向を大きく変えることはできなかったが、部局の FD 委員会での呼びかけに応じて参加した教員が複数見られた。次年度以後は、内容を充実させるだけでなく、参加者数の増加を目指した部局との連

携等を充実させることが、本事業の課題である。
(川瀬和也, 宮田政徳)

5. 大学教育カンファレンス in 徳島

a. 大学教育カンファレンス in 徳島の目的

徳島大学のFD推進プログラムの一環として実施している大学教育カンファレンスも今回で11回目となった。これまでの実践成果を基盤にして、本年度実施したFD活動の成果を検証し、FDネットワークを充実・発展させる機会となるよう、本学や他の高等教育機関で行われている教育実践の先駆的な取組みを共有し、大学教育の質的向上に向けた努力の成果を確認するために実施した。

b. 概要と成果

- ・会期：2016年1月6日(水)9:00~18:05
- ・会場：徳島大学共通教育4号館等
- ・成果：今年度は、カンファレンス内で大学教育再生加速プログラム(AP)シンポジウムを同時に開催し、他に、口頭発表19件、ポスター発表13件、ワークショップが2件行われた(表3)。その内、口頭発表4件、ポスター発表4件は学外からの発表であった。また、学生を発表筆頭者とする口頭発表が5件、ポスター発表が2件あった。午前中は、口頭発表の後、APシンポジウム(反転授業)、ワークショップ2件が平行で開催され、APシンポジウム(反転授業)では、総合教育センターの金西計英教授が司会となり「「反転授業」をやってみたー2014年からの実践を通してー」と、国際センターの坂田浩准教授による「アクティブ・ラーニングを取り入れた自律英語学習支援についてーオリジナルな英語学習方法について考えようー」と、四国学院大学の仙石桂子助教と本学の国際センターのGehrtz三隅友子教授による「アクティブからパフォーマンス型ラーニングへー身体とこえとことばを体験するー」が行われた。

今回の特別講演として、京都大学高等教育研究開発推進センター長の飯吉透教授による講演が「ICTを利用した効果的な教育・学習のための授業設計と実践」と題して行われた。また、今年度は、APシンポジウム(アクティブ・ラ

ーニング)とラウンドテーブルを同時に開催した。テーマは、「アクティブ・ラーニングを取り入れた授業実践」で、徳島大学大学院ソシオ・アーツ・アンド・サイエンス研究部の行實鉄平准教授、小田切康彦准教授、徳島大学大学院医歯薬学研究部の岡久玲子准教授からアクティブ・ラーニングを取り入れた授業についての発表が行われた。ラウンドテーブルからは、阿南工業高等専門学校の評井泰士教授から発表があり、それぞれの発表のあと全体での質疑応答があった。今回の全体の参加者は学外からの参加者17名を含む、180名であった。すべての発表終了後に情報交換会を開催した。

c. カンファレンスの成果と今後の課題

今年度は過去最高の参加者数であったことから、徳島大学の教職員・学生にカンファレンスが周知されてきていることが伺える。また、アンケートの設問「カンファレンスは全体的に満足できるものだった」(図2)、「今後もこのカンファレンスを継続していくべきだと思う」(図3)について、8割以上の参加者が「そう思う」「どちらかといえばそう思う」と回答していることからカンファレンスは有意義であったといえる。一方、今後の課題として、「他の参加者との交流を深めることができた」(図4)について、5割以上の参加者が「どちらかといえばそう思わない」「そう思わない」と回答していることから、参加者同士が交流できるような場を設定していく必要がある。口頭発表も年々増加しており、カンファレンスを2日間の開催にするなど、今後、検討していきたい。

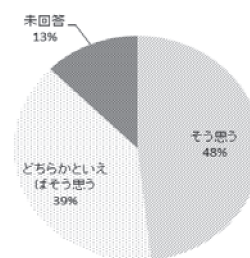


図2 カンファレンスは全体的に満足できるものだった

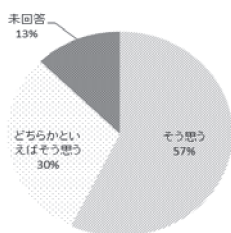


図3 今後もこのカンファレンスを継続していくべきだと思う

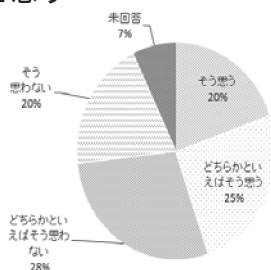


図4 他の参加者との交流を深めることができた (上岡麻衣子)

6. SIH 道場 FD・説明会

本学が 2014 年度に採択された文部科学省大学改革推進等補助金「大学教育再生加速プログラム(テーマ I :アクティブ・ラーニング)^{1) 2)}」において、2015 年度の開講に向けて準備を進めた「SIH 道場」の FD・説明会を実施した。本 FD・説明会は、各学部・学科のコーディネーターと授業担当者が、SIH 道場の目的・目標を理解し、SIH 道場の実施に必要な教育手法についての理解を深める機会を提供するものである。本節では、SIH 道場 FD・説明会の内容について報告する。

a. ねらい

本 FD・説明会は、授業設計コーディネーター、SIH 道場授業担当者が SIH 道場の概要とともに、授業で用いる e ポートフォリオ、ループリックによる評価法、アクティブ・ラーニングの手法を学ぶ機会を提供することで、SIH 道場の円滑な実施・運営を支援するためのものである。本 FD・説明会の目標は次の3つである。

- ① 大学教育再生加速プログラムの概要、当該学科の SIH 道場の詳細について理解する。
- ② SIH 道場の授業を担当するために必要な知識と技能を習得する。
- ③ OJT 型の FD として、授業実施から振り

返りまでのプロセスを理解し、実践できるようになる。

b. 概要

■開催日・会場

常三島キャンパス(共通教育6号館6-201講義室)

第1回:3月4日(水)10:00~12:00

第2回:3月10日(火)15:00~17:00

第3回:3月19日(木)17:00~19:00

蔵本キャンパス(藤井節郎記念医科学センター2階多目的室1・2室)

第1回:3月3日(水)15:00~17:00

第2回:3月11日(水)10:00~12:00

第3回:3月16日(月)17:00~19:00

■対象者

SIH 道場授業設計コーディネーター

SIH 道場授業担当者等

本 FD・説明会の対象者は、2015 年度 SIH 道場の授業設計コーディネーター、授業担当者であり、計6回のうち出席可能な回に原則として参加することとした。事情によりどうしても参加できない場合については、参加者が到達する目標及び実践する内容について、参加した場合と同等の条件を満たしていることを当該教員の所属する学科の授業設計コーディネーターが確認した上で「参加」とみなすこととした。なお、授業設計コーディネーターは、各学科における授業運営(実施、振り返り、評価等)の責任者であるため、大学教育再生加速プログラム実施専門委員会が個別に対応することとした。

■参加者

今年度の参加者は、教員94名(SIH 道場授業担当者は計188名)である。

■運営メンバー

運営メンバーは、総合教育センター教育改革推進部門長を含め、詳細は次の通りである。

氏名	所属	職名
赤池雅史	教育改革推進部門	部門長
川野卓二	教育改革推進部門	教授
宮田政徳	教育改革推進部門	准教授
吉田博	教育改革推進部門	講師
川瀬和也	教育改革推進部門	助教

久保田祐歌	教育改革推進部門	特任助教
金西計英	ICT 活用教育部門	教授

■内容

各 6 回の実施日において、表 4 のプログラムを実施した。

■全体の流れ

「挨拶・導入」では、赤池教育改革推進部門長より「徳島大学大学教育再生加速プログラムの概略」についてお話頂いた。

「SIH 道場の概要」では、SIH 道場の目標、内容、実施体制、授業設計の必須項目および担当者、教育改革推進部門の提供する支援内容について説明を行った。さらに、SIH 道場の改善に向けた評価として、学生アンケートの実施やコーディネーターが行うプログラム設計評価シートによる振り返り等について説明を行った。

「e ポートフォリオシステム」では、学生および教員が授業で学んだ内容や授業実践について振り返りを行うための学生のツールである e ポートフォリオの使用法について説明を行った。

「アクティブ・ラーニングの理論と効果やその評価」では、アクティブ・ラーニングの定義、Deep Learning と Surface Learning の違い、ルーブリックによる評価法について説明を行った。

「アクティブ・ラーニングの実践」では、アクティブ・ラーニングの手法である Think-Pair-Share やラウンド・ロビンについて参加者が体験しながら身につけられるようなグループワークを実施した。

SIH 道場は、全学的な初年次教育プログラムであり、各学部・学科における SIH 道場の開講に向けて、SIH 道場の趣旨および学生の到達目標、授業実施、終了後の授業実践の振り返りまでの一連の流れを参加者が理解することが最も重要と言える。SIH 道場の成果検証の過程において、授業設計コーディネーターが SIH 道場の実施内容や学生の学修成果、課題等の振り返りを記述した「プログラム設計評価シート³⁾」を参照すると、全ての担当教員が SIH 道場の趣旨を理解しているわけではないことがうかがえた。今後は、SIH 道場の趣旨や手順がより明確に参加者に伝わるような FD・説明会となるように

していきたい。

(久保田祐歌^{註1)})

注 1) 本報告における SIH 道場の取組は、2015 (平成 27) 年度文部科学省大学改革推進等補助金「大学教育再生加速プログラム (テーマ I : アクティブ・ラーニング)」に基づいて実施しました。

参考文献

- 1) 川野卓二, 久保田祐歌: 徳島大学の教学マネジメントと AP 採択事業「SIH 道場」による全学へのアクティブ・ラーニング展開の試み, 大学教育と情報, 2015 年度 No.3, pp. 19-21, 2015
- 2) 吉田博: 徳島大学総合教育センターによる教育改革と FD, 大学教育学会誌, 第 37 巻第 2 号, pp.187-188, 2015
- 3) 久保田祐歌, 吉田博: 学生アンケートに基づく初年次教育プログラムの現状と課題—「SIH 道場～アクティブ・ラーニング入門～」の取組—, 平成 27 年度大学教育カンファレンス in 徳島発表抄録集, pp.40-41, 2016

7. ティーチング・ポートフォリオ作成ワークショップ

a. ねらい

実質的な FD の取り組みを進めるため、「ティーチング・ポートフォリオ作成ワークショップ」を開催した。本ワークショップは 2011 年度に初めて開催して以来、今年度は 5 回目の開催である。本ワークショップは、教育の質向上及び問題解決のための相互交流と日常的な教育改善のための研修の一つとして実施し、到達目標は次の通りであった。

- ① 自身の教育活動を振り返り、教育理念と教育目的を整理することができる。
- ② 自身の教育活動を振り返り、教育戦略・方法を整理することができる。
- ③ 自身の教育活動を振り返り、成果と具体的な課題を整理することができる。
- ④ 参加者同士の関係をつくることのできる。

表3 2015年度 FD 推進プログラム
「大学教育カンファレンス in 徳島」プログラム

会期：2016年1月6日(水) 会場：徳島大学共通教育4号館等

8:30~ 9:00	副学長挨拶 高石 喜久 <共通教育4号館2階ホール>	<p>口頭発表A 座長：佐田 政隆 <4号館202講義室> A① 9:15~9:30 ■Jリーグチームをフィー ルドとした体験学習プロ グラムのジェネリックス キル評価 大学院/ホ・ア・ツ・ア・ド・ホ・エ・ス 研究部 行貫 鉄平 他</p>	<p>口頭発表B 座長：石田 徹 <4号館203講義室> B① 9:15~9:30 ■学生と図書館職員との協働に よる学習支援の実績と将来 展望~学びサポート企画部 のこれまでとこれから~ 総合科学部総合理数学科1年 下村 宗央 他</p>	<p>口頭発表C 座長：坂間 益 <4号館204講義室> C① 9:15~9:30 ■中学・高校への化学実験 出張講義におけるティ ーチングアシスタントの役 割と継続的改善 大学院/ホ・ア・ツ・ア・ド・ホ・エ・ス 研究部 南川 慶二 他</p>
9:00~ 9:15		<p>A② 9:30~9:45 ■ジェネリックスキル育成 の試行と検証 阿南工業高等専門学校 坪井 泰士</p>	<p>B② 9:30~9:45 ■ロケットプロジェクトを通 して得られたこと 工学部生物工学科2年 戸田 夏木</p>	<p>C② 9:30~9:45 ■社会人および大学院生を 対象とした危機管理人材 養成プログラムの実践 -四国防災・危機管理特 別プログラム- 環境防災研究センター 三上 卓 他</p>
9:15~ 10:00		<p>A③ 9:45~10:00 ■阿南高専におけるAP事 業の取組状況報告-コン ピテンシー育成と学修成 果の可視化- 阿南工業高等専門学校 松本 高志 他</p>	<p>B③ 9:45~10:00 ■先行研究を活かしたた らプロジェクトの取り組み 工学部生物工学科2年 野口 愛佳</p>	<p>C③ 9:45~10:00 ■化学応用工学科学部生の 大学院進学に関する意識 大学院/ホ・ア・ツ・ア・ド・ホ・エ・ス 研究部 外橋 健一郎 他</p>
10:00~ 10:10	休憩	休憩		
10:10~ 10:40	<p>ワークショップA <4号館202講義室></p> <p>◆アクティブラーニングを 取り入れた自律英語学習 支援について-オランダ ルな英語学習方法につい て考えよう-</p> <p>国際センター 坂田 浩</p>	<p>ワークショップB <5号館2階 会議室></p> <p>◆アクティブからパフォーマ ティブラーニングへ-身体 とこえとことばを体験する</p> <p>国際センター Gehertz 三隅友子 他</p>	<p>APシンポジウム (反転授業) <4号館302講義室></p> <p>◆「反転授業」をやってみ た-2014年からの実践を 通して-</p> <p>総合教育センター 金西 計英 他</p>	

11:40~ 11:55	休憩	<p>ポスター発表 <5号館2階 学生自習スペース> 奇数番号11:55~12:35 偶数番号12:35~13:15</p> <p>①高大接続科目・数学から見える学生の学習状況 大学院/ホ・ア・ツ・ア・ド・ホ・エ・ス研究部 大沼 正樹 ②東日本大震災から学ぶ、防災教育の実態とあり方~福島と徳島における放射線教育 についての調査報告を含めて~ 総合科学教育部地域科学専攻 小野 寛久 他 ③色覚特性者に関する予備調査の結果と応用工学から教育工学に対して可能な提案 大学院/ホ・ア・ツ・ア・ド・ホ・エ・ス研究部 森 篤史 ④公開講座におけるプロトタイプリング手法を用いた体験型教育の実践 大学院/ホ・ア・ツ・ア・ド・ホ・エ・ス研究部 辻 明典 他 ⑤ゲーム開発によって向上する能力を考察 工学部知能情報工学科2年 東 一希 他 ⑥アカデミック・ポートフォリオ作成ワークショップに関する一考察 阿南工業高等専門学校 松本 高志 ⑦臨床実習での技能トレーニングにおける反転授業の効果 教養教育院(仮称)設置準備室 岩田 貴 他 ⑧ICT活用教育を目指したLMS導入初年次の取組 阿南工業高等専門学校 菊池 弥生 他 ⑨大人数制キャリア教育における効果的手法の開発と検証-アクティブ・ラーニング による社会人基礎力の育成- 総合教育センター 島 一樹 他 ⑩コンピテンシー育成を意図した授業実践 阿南工業高等専門学校 川畑 成之 他 ⑪共通教育課程における留年のリスクファクターに関する研究 医学部教育支援センター 三笠 洋明 他 ⑫映画を活用した授業実践-ジェネリックスキルの育成に向けて- 愛媛大学 小林 忠資 ⑬基礎物理学講義のFCIによる評価 教養教育院(仮称)設置準備室 齊藤 隆仁 他</p>
13:15~ 13:30	休憩	<p>特別講演 司会：川野卓二 <4号館201講義室> 演題：ICTを利用した効果的な教育・学習のための授業設計と実践 講師：飯吉 透先生(京都大学高等教育研究開発推進センター長 教授)</p>
15:00~ 15:10	休憩	

本ワークショップは、SPOD の FD プログラムであるため、徳島大学教員だけでなく、SPOD 加盟校の教員も対象としている。ティーチング・ポートフォリオは、教員個人が教育活動を振り返り、自身の教育理念、教育目的、戦略、方法、成果、課題などを中心にもとめていくものである。参加教員（メンター）にメンターが寄り添い、話し合いを重ねながら自身のティーチング・ポートフォリオを3日間かけて作成する。参加者同士で対話を行いながら、自身の教育活動について3日間集中して振り返る作業を行っていくものである。

b. 概要

■開催時期

2015年3月9日（水）～3月11日（金）

■会場

共通教育6号館201（大学開放実践センター2階）
日亜会館2階講義室1

■参加者（申込順）

氏名	所属	職名
桑村由美	医学部	助教
南川貴子	医学部	准教授
三笠洋明	医学部	特任准教授

■運営メンバーおよびメンター

氏名	所属	職名
赤池雅史	教育改革推進部門	教授
清水栄子**	愛媛大学	講師
川野卓二	教育改革推進部門	教授
宮田政徳	教育改革推進部門	准教授
吉田 博	教育改革推進部門	講師
川瀬和也*	教育改革推進部門	助教
南川慶二*	工学部	准教授

*はメンター担当、**はスーパーバイザー担当教員

■内容

3日間にわたって表5のプログラムを実施した。

c. 成果と課題

プログラム終了直後、参加者3名に事後アンケートを実施した。各項目に対し、「そう思う」

「どちらかといえばそう思う」「どちらかといえばそう思わない」「そう思わない」の4段階で評価を行った。

特に参加者全員が「そう思う」と回答した評価の高い項目は、「研修は全体的に満足できるものだった」、「ティーチング・ポートフォリオは自身の教育改善につながった」であった。「ティーチング・ポートフォリオの作成を同僚にもすすめたい」という項目でも全員が肯定的な回答であった。

また運営面においては「メンターからの助言は役に立った」、「事務局は手際よく研修を運営した」、「ワークショップの目的は明確に設定されていた」、「ワークショップは自身のキャリアにとって有意義な内容だった」の設問では、参加者全員が「そう思う」と回答した。

このことから、参加者にとってポートフォリオ作成による教育活動の振り返りが有意義なものであったことが伺える。また、ワークショップ形式で、メンターのサポートのもとポートフォリオの作成を行うことが教育改善に有効であることが裏付けられた。

成果と課題に関連する項目で、上述した項目以外については、次の4つの項目について自由記述として回答を得た。参加者から得られた回答すべてを次にあげる。

(1) ティーチング・ポートフォリオを作成したご感想をお聞かせください。

◆非常に良い振り返りになりました。

◆自身の教育を振り返る事になった。これまでした事がなかった！

◆始めはどうなるかと思いましたが、自分の教育の理念も明確になり、今後の教育に大いに役立つと思います。

(2) ワークショップに参加して良かったと思われる点を、具体的にお書きください。

◆自分の教育について振り返り、根底となるものを作ることができてよかった。

◆メンターの先生、スタッフの方との出会い。

◆自分の原点を見つめなおすことができ、これがこれからの教育のパワーとなると考えました。また、情報交換会も非常に有意義でした。

(3) ワークショップの場所、開催時期、日程等についてのご意見をお聞かせください。

◆ワークショップの場所はわかりやすくよかったです。／時期も3月で一番参加しやすかったです。／日程も3日間で集中で行っていただけただけで他の雑念もなく取り組みました。

◆蔵本でお願い！

◆良いタイミングで場所もよかったです。

(4) ワークショップをよりよいものとするために改善すべき点があれば、具体的にお書きください。

◆教育についてディスカッションができると良いと思います。

◆前もって例を見る事ができる。／知識を得るだけのFDをする。目標を示して、方法は本人にまかせる。

参加者の感想から、ポートフォリオ作成の重要な目的である「振り返り」が確実に行われたことが読み取れる。また、参加者間の交流が促される効果もあったことがわかる。

ワークショップの開催時期について、昨年度までは3月の第1週に実施していたが、参加者の声を受けて、今年度は1週遅らせて実施した。また、実施期間について、昨年度は2日間を設定していたが、アンケートで作業量が多く負担感が大きいとの声があったため、今年度は3日間の実施とした。このことについても、おおむね好評であった。実施場所については、特に今年度は参加者全員が医学部に所属していたことから、蔵本での実施を望む意見があった。今後医歯薬学部からの参加者がさらに増加すれば、蔵本キャンパスでの実施も検討すべきだと思われる。

本ワークショップは年々参加者が減少する状況にあったが、今年度、わずかではあるが増加へと転じた。ティーチング・ポートフォリオ作成ワークショップは拘束時間が長く申し込みに躊躇する教員が多いが、一方で参加者からの満足度は非常に高いプログラムである。このことから、少しずつ作成経験者が増え、ワークショップの利点が周知されることが、参加者を増やすための重要なポイントとなる。今後も少しずつ

参加経験者を増加させるとともに、広報のさらなる工夫を行っていくことが重要である。

表5 2015年度ティーチング・ポートフォリオ作成ワークショップ
第1日 (2016年3月9日・水曜日)

集合場所：共通教育6号館201 (徳島大学大学開放実践センター2階)			
時刻	内	容	講師・担当者
11:30-12:00	受付 (共通教育6号館201)		
	オリエンテーション		川瀬和也 (進行)
12:00-12:30		・ はじめに (FD委員会委員長よりあいさつ) ・ 自己紹介 (スタッフ・参加者) ・ ティーチング・ポートフォリオとは	赤池雅史 スタッフ全員
12:30-13:30	アイズブレイク	昼食	各メンターから 担当メンティーへ
	・ 初校へ向けての共通アドバイス メンター、参加者との交流		
13:30-15:00	第1回 個人ミーティング		スタッフ全員
	各自メンタリングルームへ移動		
15:00-17:00	TP作成作業		
19:00-21:00	情報交換会 (任意参加)		

第2日 (2016年3月10日・木曜日)

時刻	内	容	講師・担当者
9:00-10:00	TP作成作業		
10:00-11:00	第2回 個人ミーティング		スタッフ全員
	各自メンタリングルームへ移動		
11:00-12:00	TP作成作業		
	意見交換 昼食		
12:00-15:00		・ 第1稿に共通するコメントと情報共有 ・ 第2稿をまとめるにあたって	清水栄子
13:00-14:00	第3回 個人ミーティング		スタッフ全員
	各自メンタリングルームへ移動		
14:00-17:00	TP作成作業		

第3日 (2016年3月11日・金曜日)

時刻	内	容	講師・担当者
9:00-10:00	TP作成作業		
10:00-11:00	第4回 個人ミーティング		スタッフ全員
	各自メンタリングルームへ移動		
11:00-12:00	TP作成作業		
	意見交換 昼食		
12:00-13:00		・ 第3稿をまとめるにあたって ・ TP披露の形式説明	清水栄子
13:00-14:00	TP作成作業		スタッフ全員
	・ プレゼンテーションの準備 (A4 1枚程度)		
14:00~	プレゼンテーション準備		
	TP披露・修了式		川瀬和也 (進行)
	・ メンティーによるプレゼンテーション ・ 副学長より挨拶		高石喜久
15:00-16:00		・ 修了証授与 ・ 記念写真 ・ ワークショップを振り返って	